

わが国は陶芸が盛んだといわれているが、そのうちでも九州には有田焼きを初めとして、さつま焼・三彩焼・小鹿田(おんだ)焼・上野(あがの)焼・小石原焼・高取焼・宝珠焼等々有名な焼物が沢山ある。

このことは、文禄元年(1592)年に豊臣秀吉の命で朝鮮へ出兵した鍋島直茂が、朝鮮から陶工を捕虜として連れ帰ったことに原因する。即ちこれが今日の有田焼の元祖であり、島津藩では「沈」氏がさつま焼の元祖であることなどは、今日人々のよく知るところである。

一方、後年江戸時代には、幕府のやりとぎの禁制の強化により鎖国令が出され、通商貿易は専ら中口とオランダのみに限られた。このことからその門戸であった長崎と博多には南蛮や中口の味覚が輸入されて、たとえば長崎の卓袱(しっぽく)料理のよくな独特の料理をはぐくみ、今日に伝えている。

この料理と食器は不可分のもので、料理とより一層引き立てる脇役としての食器を、改めて考えて見たいと思うのである。